

耳納風土記⑧

とりふねづか
 ～太古の芸術作品～発掘された鳥船塚古墳～



月日が経つのは早いもので、今年も最後の耳納風土記の連載になりました。今年には新型コロナウイルスが猛威をふるい、いつもより長い時間を自宅で過ごしたり、遠出ができなかった人も多かったことと思います。そのような中で耳納風土記を、郷土の誇りを見つめ直すきっかけにいただければと思います。

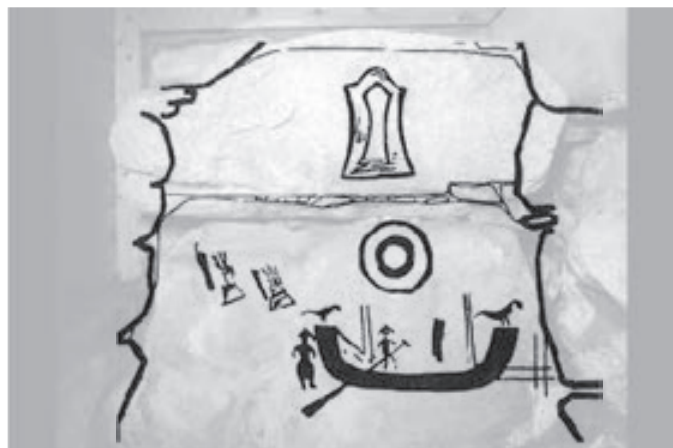
さて、9月から始まった装飾古墳シリーズの連載4回目ですが、今回は吉井町富永の屋形地区に所在し、国指定史跡屋形古墳群を構成する古墳の1つ、鳥船塚古墳を紹介したいと思います。鳥船塚古墳は6世紀後半に築造された円墳ですが、残念なことに現在は墳丘が残っておらず、壁画のある奥壁の上下2段の2石が覆屋に現存するのみです。主文様は1段目で、古墳名の由来ともなった鳥船です。舳先と艫へさきとに各1羽の鳥がとまり、船尾には櫂かいを操る人物が描かれます。船の真上には同心円文、左端には大刀と靱ゆぎ2組を添えています。2段目には同心円文のほぼ真上に盾が描かれています。いずれも赤色の彩色です。装飾古墳シリーズ2つ目に紹介した珍敷塚古墳（広報うきは10月15日号）にも同じように鳥と船が描かれていましたね。まだ紹介していませんが、屋形古墳群を構成する古墳の1つに原古墳という古墳があり、この古墳にも大きく船が描かれているのです。当時の人々にとって、船は特別な存在だったことが想像できます。単に交通手段としてだけではなく、魂を運ぶ神聖な乗り物としても認識されていたのかもしれません。



◀ 鳥船塚古墳奥壁の覆屋



◀ 奥壁に描かれた装飾



◀ 装飾のイラスト

実はこの鳥船塚古墳は平成28年に発掘調査が行われました。その結果、地中から石室の一部の痕跡が発見され、覆屋内2石も築造当時の元々の位置を保っている可能性が高いことが判明しました。当初、鳥船塚古墳は開発によって完全に破壊されており、現在残る2石も元位置を保っていないと思われていましたが、辛うじて生き残っていることが判明した重要な調査となりました。



▲発掘調査時の様子（平成28年）

それでは次に、鳥船塚古墳にまつわる保存と開発のエピソードを紹介します。鳥船塚古墳は昭和25年3月、珍敷塚古墳の再発見から2か月後に発見され、保存されることとなった古墳です。しかし、浮羽女学校（現浮羽究真館高等学校）の田中幸夫氏が調査で現地を訪れた際にはすでに墳丘は破壊されており、残っていたのは装飾のある石室の一部だったとのこと。後に郷土史家が「こんなことで古墳を壊すとバチかぶるぞ」と言ったところ、土地の所有者からは「ああたちゃ、おどんに飯ば食わしてくるっとな」と反論されたとのこと。当時は戦後間もないころで人々は貧しい生活を強いられており、土地を切り拓いて生きる糧を得なければいけません。その土地に生きる人々にとっては史跡の保存よりも生活が大事なのが当然のこととも言えます。屋形に限らず、開発に伴って多くの古墳が姿を消してきた中で、現在の屋形古墳群4基は辛うじて生き残ってきた古墳群です。特に鳥船塚古墳は、古墳の破壊と、保存とのせめぎあいを感じさせてくれる古墳でもあります。現在装飾は公開されていませんが、現地には説明板も立っていますので、もし近くを通りかかった際は足を運んでみてはいかがでしょうか？



▲発掘で姿を現した石室の痕跡

さて、鳥船塚古墳のお話は以上になります。

そして、装飾古墳シリーズの連載はこの4つ目でいったん終わりにしたいと思います。うきは市には残りあと3つほど本誌で紹介していない装飾古墳がありますが、古墳の他にも紹介したい文化財がたくさんありますので、きりの良いところでいったん区切りにします。今後またいずれ紹介する機会がくるかと思しますので楽しみにお待ちください。

古墳見学のご案内

毎月第3土曜日に装飾古墳の珍敷塚古墳・日岡古墳に加え、月岡古墳・楠名古墳の一般公開をしています。うきは市郷土史会の史跡案内グループが現地解説をします。見学日の5日前までにお申込下さい。

※現在新型コロナウイルス感染拡大防止のため、申込み人数によってはお断りさせていただく場合もございますので、ご了承ください。

●問合せ・申し込み 吉井歴史民俗資料館 ☎75-3120